

## ユーラシア・ユダヤ史をめぐる断章

高尾 千津子

ロシアはユーラシア大陸の大半を占め、ヨーロッパとアジア双方と密接な関係を持ち、この広大な領域に住む人々も多様である。ロシアは一九世紀末五〇〇万を超える世界最大のユダヤ人を擁し、二〇世紀を通してロシアユダヤ人のディアスポラはユーラシアの各地へ、さらにアメリカ大陸へと広がった。ここでは日本を含むユーラシア・ユダヤ史という視点に立つて筆者の研究について綴ってみた。

ロシア極東のユダヤ自治州―ビロビジャン

ロシア極東（バイカル湖以東）の中国との国境を流れるアムール川流域に「ユダヤ自治州」という名の土地がある。州都はビロビジャンで、成田からウラジオストク航空でハバロフスクまで飛び、ハバロフスクからはシベリア鉄道で西へおよそ三時間の距離にある。ビロビジャンという名前はアムール川に注ぐ支流、ピラ川とビジャン川に由来する。

この自治州が建設されたのは一九三四年のことだった。言語かどうか疑わしい「ジャルゴン」と思われていたイディッシュ語を話し、まとまった土地に住まないロシアのユダヤ人が民族なのかどうかにつ

ユーラシア・ユダヤ史をめぐる断章（高尾）

いてはロシア革命前からマルクス主義者たちの間で論争になっていたのだが、一九二二年末にソ連が結成された後、当時二六〇万というソ連有数の「民族」であったユダヤ人にも連邦構成単位を与えようということになった。そこで選ばれたのがこの極東の土地であった。当時はモスクワからシベリア鉄道で二週間もかかる辺境であり、もちろんユダヤ人は一人も住んでいなかった。

スターリン体制の成立期と重なる時代に、極東にユダヤ人の母語イディッシュ語を公用語とする「共和国」を作ろうというこの「ビロビジャン計画」が、鳴り物入りで始まることになった。一九二八年の計画開始からたった六年後に急ごしらえで「建国」され、多くの移民がやってきたが、計画はずさんで過半数が脱落した。ソ連国外にも大いに宣伝され、社会主義建設に参加しようと外国からも多数移民した。アメリカ西海岸からの移民たちは日本を経由してビロビジャンへやってきた。ところがドイツやオーストリアからの避難民にとって「ユダヤ人国家」が最も必要とされた時期になるとソ連は門戸を閉ざしてしまう。

この「ビロビジャン計画」は私の修士論文テーマであった。この計画はソ連ユダヤ史の謎であり、ソ連の民族政策の矛盾が凝縮していると考えていた。だが当時、私の主題はソ連では研究不可能で、ソ連留学も考えられなかった。なにしろソ連ではアルヒーフ史料どころか、図書館でも私が必要な本の多くは棚から消えていた。院生時代に *International Library Loan* を通してレーニン図書館（現ロシア国立図書館）に依頼した図書はことごとく「貸出不可」の返事であった。日本の目と鼻の先にあるこの自治州も、アクセス不能の土地だった。さらに言語も問題だった。西側に流出した資料の多くがイディッシュ語資料で、最も重要な先行研究はヘブライ語で書かれていた。当時欧米やイスラエルのユダヤ系研究者たちはこれらの言葉を自由に操れたが、当時の私にはまったく読めなかった。思えば無謀なテーマを選



ビロビジャンのシナゴーク（2007年筆者撮影）

扱ったものである。資料をめぐるこうした諸々の問題が解決したのは八五年から三年間エルサレムのヘブライ大学に留学した後のことである。留学から帰ってしばらくするとソ連が崩壊した。

ビロビジャン現地を初めて訪れたのは、ソ連崩壊からしばらくたった一九九五年夏のことであった。この年ハバロフスクで開催された「太平洋沿岸ロシア」国際会議に招待され、日本からの視点でビロビジャン計画を報告したのだが、このとき初めて、この主題が欧米やモスクワ中央の視点からしか研究されていないことに気がついた。不思議なことだが、この国際会議の準備をするときまで私には日本の文書館資料を利用するという考えがなかった。実は日本の外務省や軍は「満洲国」対岸に着々と建設がすすむ「ユダヤ自治州」に関する情報を様々な手段で収集していたのである。

ビロビジャンにはその後も何度か訪れる機会があり、特に二〇〇七年には三週間滞在して自治州各地をまわることができた。皮肉なことに現在、ビロビジャン現地のアルヒーフではイディッシュ語の資料が閲覧できない。

ユーラシア・ユダヤ史をめぐる断章（高尾）

イディッシュ語を公用語としていた土地であるにもかかわらず、アーキヴィストにイディッシュ語の知識がなく、資料が未整理なためである。

旧ソ連におけるホロコースト

三年前から私は「ユーラシア・ユダヤ現代史の構築」という主題で科研の助成を受けてロシア史研究者とユダヤ現代史研究者による共同研究を行っているが、この研究を立ち上げた目的のひとつは、ロシア史とユダヤ史との融合を試みることであった。要するにユダヤ研究ではユダヤ人社会内部の問題に限定されがちで、地域における政策一般との関連性が無視され、一方、ロシア・ソ連史では「ユダヤ・ファクター」が意識的に排除される傾向がある。この境界線を越えることで、より広い地平が見えてくると考えたからである。

さて、第二次世界大戦期のナチ・ドイツによるユダヤ人の組織的殺戮（ホロコースト）の問題は、ロシア人とユダヤ人の歴史観の違いが際立つ問題である。ホロコースト研究はドイツ現代史だけの問題でなく、ヨーロッパ史全体からのアプローチが必要であるが、ロシアのホロコースト認識は欧米諸国とはまったく異なっている。独ソ戦の開始はホロコーストの決定的な要因となり、ホロコーストによる犠牲の半数が旧ソ連領域内で起きていた。バルト諸国、西ウクライナといったソ連の併合地域はホロコーストの主要な舞台であった。にもかかわらず、戦後ソ連でホロコーストが歴史研究の対象となることはなかった。バルト諸国やウクライナは、独立して初めて自国のナチ協力者の問題と直面したのである。昨年一二月に私はモスクワからイリヤ・アルトマン教授を招聘して東京で二つの研究会を主催した。アルトマン氏はロシア・ホロコースト研究教育センター議長であり、同センターはロシアをはじめとする旧ソ連諸国のホロコースト研究の促進と、教育の普及を目的に一九九一年に設立された。アルトマン氏は

大戦末期にワシーリー・グロスマンとイリヤ・エレンブルグがソ連各地で収集したユダヤ人虐殺をめぐる資料集『黒書』（ソ連では弾圧され、長くKGBアルヒーフの管理下に置かれていた）をペレストロイカ期に発見し、一九九〇年にソ連で出版した。これがソ連におけるホロコーストをめぐるタブーを打ち破ることになる。近年は『ソ連におけるホロコースト百科事典』（ロシア語、一、一四三頁、二〇一一年）の編集主幹をつとめた人物で、彼を招いた理由の一つは、我が国ではまったく知られていないロシアのホロコースト研究の現状と展望について報告してもらったことであつた。ロシア史研究会の協賛を得て、一二月一七日に早稲田大学ロシア研究所（鈴木健夫所長）で開催されたアルトマン教授の報告は、近い将来何らかの形で出版したいと思つている。ソ連のアルヒーフからの新資料のほとんどは、まだ欧米のホロコースト研究に反映されておらず、我が国のロシア・東欧史研究者ばかりでなく、ドイツ現代史研究にとつても新しい重要な発見があると思われる。教授の報告から浮かび上がったロシア特有の問題は、ホロコースト研究そのものに対する歴史家の無理解あるいは反発であつた。ユダヤ人の犠牲を特別視することが、「大祖国戦争」でのソ連人民の犠牲に対する冒涇とみなされる傾向があるという。またホロコースト研究の進展と同時に、皮肉なことであるが、ロシアでもホロコースト否定論が出現している。ロシア史においてホロコーストという悲劇がただしく認識されるまで、まだ時間を要するだろう。

もう一つの研究会は翌一八日に立教大学で開催した。実はアルトマン教授を招聘した最大の目的はヨーロッパからのユダヤ難民救援をめぐる日ソ「連携」の謎を探りたいと思つたことであつた。一九四〇年夏、ユダヤ人に大量の日本の通過ヴィザを発給したりトリアニア領事代理の杉原千畝についてはよく知られているが、この「杉原ヴィザ」にはソ連の通過ヴィザが必要だったことはあまり知られていない。難民たちはカウナスからモスクワを経て、シベリア鉄道経由でユダヤ自治州を横断、ウラジオ



（写真）12月18日の研究会 右から4人目がアルトマン教授

ストックから敦賀港にたどり着いた。

ところがこの微妙な時期に大量の外国人に国内通過を許可した経緯にかんするソ連の意図はまったく不明で、史料はいまだ公開されていない。杉原は三〇年代半ば満洲国外交部のロシア科長をつとめた後、在モスクワ大使館勤務の予定であったがソ連側によって入国を拒否されたというエピソードがある。これは満洲国時代の杉原の活躍（特に北満鉄道売却問題で通訳を務めた杉原の活躍）に対する意趣返しであった。ロシアのどこかに杉原個人にかんする一件書類があるはずである。ソ連末期に「十月革命中央国立公文書館」（現ロシア国立公文書館）のアーキヴィストであったアルトマン教授は、ロシアの公文書事情に最も詳しい人物の一人である。研究会ではロシア側からアルトマン教授、日本側からは杉原研究の第一人者である外交史料館の白石仁章氏を招き、この問題をめぐる史料について日ロ双方から様々な情報交換が行われた。現在、日ロ協力での資料集発行にむけて糸口を見つけたところである。

（本学文学部特任教授）